Co だより

群馬県立太田高等特別支援学校
コーディネート係発行
第４６号　平成３０年　９月　３日

平成 30 年度 「発達障害教育実践セミナー」～その２～

３．第三分科会：「中学校・高等学校における通級による指導」

宮崎大学教育学部教育臨床心理（特別支援）講座講師　半田健

①指導・支援のポイント（丁寧な合意形成）

思春期の発達障害のある生徒は、「なぜ、自分は他者と同じようにできないのか」といった自己否定感を強めやすい。本人の気持ちに寄り添い、決して「押し付け」にならないよう配慮しながら、不得意なことばかりでなく、得意なことやできることに気付かせ、それらの積み上げにつながる支援が必要である。

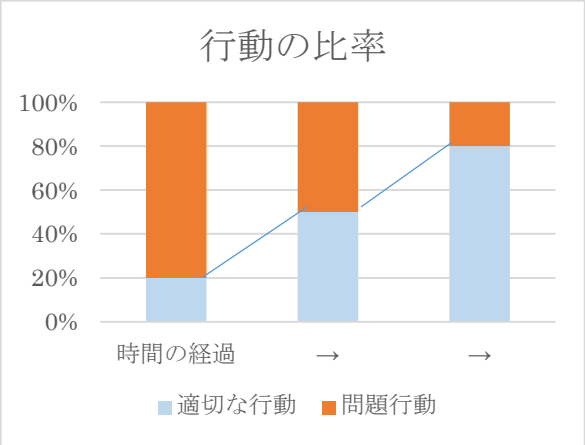
②校内の特別支援教育の推進に向けた提言

スクールワイド PBS（Positive Behavior Support）

学校全体の児童生徒が落ち着いて行動できるようにするためには、学校をシステムとして捉え直したユニバーサルな介入が必要である。つまり「ユニバーサルな学級・学校規模の介入」が必要であることが明示されている（第１層）。さらに、その一つ上の層（第２層）には、「リスクのある」児童生徒が位置し、小集団での指導が推奨されている。一番上の第３層は、深刻な問題行動を現在示している一群を示し、個別の集中的な介入が必要となる。

スクールワイド PBS における各層の支援例
【第１層支援】 ・学校全体で生徒に期待する行動を支援 【第２層支援】 ・小集団でのソーシャルスキルトレーニングや時間外での学習支援等 【第３層支援】 ・通級指導教室や特別支援学級等での集中的な個別指導や他職種・専門家との連携等

発想を転換した生徒指導　５つのポイント
(ア) 児童生徒の不適切な行動だけに注目せずに、適切な行動に注目すること (イ) 個々の教師による児童生徒指導（生活指導）から学校組織マネジメントへ (ウ) 個別支援から環境調整へ (エ) 問題行動だけに対応する指導から関係づくりの指導へ (オ) 対処から予防へ



応用行動分析では、人がある行動をしない理由には、①やり方を知らない、②その行動を続けられるような働きかけがない、という２つだけであると考えている。問題行動を減らすという考え方から望ましい行動・適切な行動を増やすという考え方（問題行動着目型から適応行動着目型）に発想を転換するのである。

問題行動に対する過度な注意（説教）や罰を与える対応は、学校の生徒指導場面で比較的起こりやすい。厳し

く叱責するような指導ばかり続けているとその教師の言うことは聞いても他の教師の指導に従わないということが起きてくる。このような対応の効果は一時的であり、以下の副次的な望ましくない作用をもたらす。

・「見つからないようにやる」ということを学ぶ。
・罰に慣れてしまう（罰のエスカレート）
・抑うつや場面回避、対人回避を招く。
・自分より弱い立場の人に罰を使うことを学ぶ。

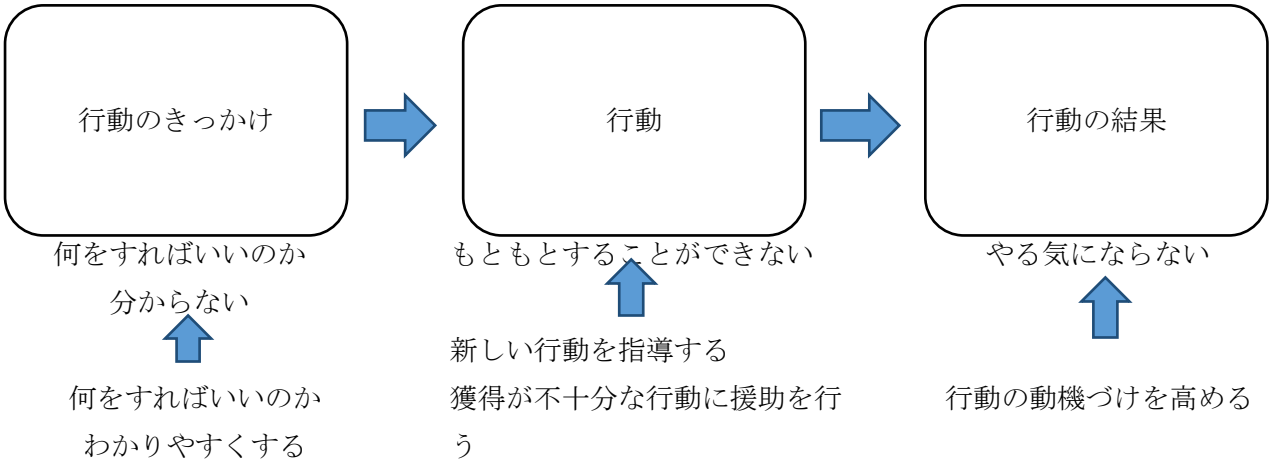
注意すること自体を否定するのではない。毅然とした態度で、ダメなことはダメであると、静かに伝えればよいのである。静かに注意しても指導としての効果が出るような、児童生徒との関係を作ることが重要である。

生徒指導には学校としての一貫性が必要である。指導手続きのダブル・スタンダード化をおこさないという点においても指導の根幹となる「わが校における望ましい行動」について話し合い、作り上げていく必要がある。落ち着いて安定した学校作りをすることで、発達に課題のある児童生徒への合理的配慮もダブル・スタンダードなどという不満の声が出ることを防げる。

何も起きていないときにこそ働きかけ、児童生徒の心を育てる予防的・発達促進的な発想に転換することが大切である。問題行動だけに注目せず、適切な行動にこそ注目すべきなのである。

適切な行動（して欲しい行動）を引き出す方法

応用行動分析（ABA）に基づく考え方



スクールワード PBS の利点

支援の必要な児童生徒の選定で第 1 層支援の充実を図ることで、個別性の高い第 2 層や第 3 層支援を真に必要とする児童生徒を絞り込むことができ、限られた時間や労力の中で、より的確な支援が可能になる。

生徒に関する効果

①いじめ等の問題行動の減少
②主体的な活動の増加
③学力の向上

教員に対する効果

①叱責の減少
②教員間のチーム力の向上
③学校の補修費用の減少等